

# 大会テクニカルレポート

大会名 第40回全日本少年サッカー大会 東京都中央大会

東京都少年サッカー連盟 委員長 高山 清  
技術指導部長 井上 雅志  
(文責) 技術指導部 佐藤 格史

## 大会概要

日程	会場	天候
11月5日(土)	南豊ヶ丘フィールド	快晴
11月6日(日)	稲城長峰スポーツ広場	晴れ
11月12日(土)	小石川運動場	晴れ/曇り
11月13日(日)	南豊ヶ丘フィールド	晴れ
11月19日(土)	南豊ヶ丘フィールド・町田市立陸上競技場	雨
11月20日(日)	町田市立陸上競技場	晴れ
11月23日(祝)	味の素スタジアム西競技場	曇り/少雨

## 結果概要

優勝	府中新町FC	準優勝	シルクロードSC
3位	三菱養和SC調布ジュニア	4位	横河武蔵野FCジュニア

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今年度	94	290	3.09
昨年度	94	325	3.46

## 講評

～東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために～

### ① 観て判断する

「判断」するための前提として「観る」事が重要なのは言うまでもないが、「事前」に観る事が習慣化されている選手は、得られた情報の中からベストなプレーを選択(判断)し、数多くのチャンスを創り出していた。そういった選手が数多くいるチームが上位に進出する傾向が今大会でも認められた。一方で、ボールを受けて(オンになって)から、観る(≒探す)ために、フリーなのに前を向けなかったり、ファーストタッチにアングルを付けられず、効果的なターンからのサイドチェンジが出来ない、ダイレクトプレーでの局面打開が出来ないなどのプレーも散見された事から、「事前」に「観る」事が習慣化される様な日常トレーニング環境の確保が望まれる。

### ② 判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

ゴールからの逆算での、戦術的な意図を持った、ファーストタッチと創造的なプレーが、多くの試合、多くの局面で見られた。ただ、比較的緩いプレッシャーでのオン・ザ・ボールのテクニックは、非常に高い技術を持ちながら、相手のプレッシャーが厳しくなると、自らのコントロールミスでボールを失うシーンも見受けられた。また、判断を伴わないノージャッジでのクリアが見受けられたのは、今後の課題である。

### ③ 攻守に関わり続ける

攻撃面では、リスクを負いつつ、オーバーラップによる数的優位での攻撃をコンセプトとするチームが増えてきていると感じられた。特にサイド攻撃ではその傾向が顕著に認められた。一方で、逆サイドの選手や三人目の選手などオフ・ザ・ボールでの動きの質(運動性)には課題が残った。守備面では、1回戦から、準決勝・決勝に至るまで、昨年以上にインターセプトのシーンが各試合で確認された。「守備」が単なる受け身のリアクションプレーではなく、「相手の戦術の意図を読みボールを奪う」「奪ってゴールに迫る」と言った攻撃の第一歩であるとの意識が高まって来た良い傾向である。この傾向を継続しつつ、攻守両面でのよりコレクティブなプレーが展開される事に期待したい。

### ④ 積極的にコミュニケーションできる

各チームにキャプテンシーを持って積極的に自分の考えを伝えたり、戦況を見据えて攻守両面に渡り指示を送り続ける選手が見受けられた。ただ、失点直後や劣勢なゲーム展開になった時には、コミュニケーション不足に陥る傾向があり、ゲームの流れを自分達で引き戻すメンタル・タフネスが必要だと感じられた。

### ⑤ リスペクトの心をもてる

互いに違うユニフォームを着ていても、試合中に激しいボール奪取を繰り返していても、試合後には選手同士が互いの健闘を称え合うシーンが数多く見られた。準決勝では、試合終了直後に勝利した選手が、ピッチに倒れ込んだ敗れた相手チームの選手の肩を叩いて慰めていたシーンは、とても清々しく感じられた。また、審判に対するリスペクトも多くの選手に浸透し、スムーズにゲームが進行されていた。フェアプレーの精神が着実に浸透していると感じられた。昨年同様、ロッカールームの清掃や、試合会場の片付けなどが定着して来た事は素晴らしいと思う。

## (総評)

今大会も、GKからのビルドアップなど、ポゼッションをコンセプトにゲーム展開するチームが増えて来た事は良い傾向であると思う。一方で、バイタルエリアへ縦パスが効果的に入れられず、シュートに結び付けられないシーンもあり、今後はゴールを目指した意図のある、相手の守備のブロックを崩すためのポゼッションを意識するべきであろう。広義のポゼッションで言えば、サンプリングでの検証ながら、スローインの成功率が60%程度である事から、受け手と連携したスローワーのボールの入れ方には、改善の余地がある様に感じられた。今大会は、東京都U-12リーグ2年目を迎えての大会であったが、ベスト8に1部リーグチームが5チーム、2部リーグチームが3チームと、拮抗したゲーム環境でのトライ＆エラーが持続的に可能な「リーグ戦」の効果を感じさせる内容であった。その中で優勝した府中新町FCは、前線からの激しいチェイシングや粘り強いディフェンスと言った「ボールを奪う」アグレッシブなプレーが印象的であった。全国大会での活躍に期待したい。また女子チームは、3回戦まで勝ち上ったパティFCを筆頭に、昨年度以上のテクニックに加えたフィジカルコンタクトや空中戦での強さに、今後の飛躍を期待させる健闘ぶりであった。